

「残る絵」への道しるべ 3

脇田和と高山辰雄 時代に流されず、優れた表現世界を獲得した画家たち——金子美樹

日本画の高山辰雄と洋画の脇田和。ともに大きな画家だ。これに版画の清宮質文が加われば言うことはない。生年からいえば、脇田が1908（明治41）年生まれ、高山は1912（明治45）年、清宮はやや下がって1917（大正6）年生まれ。画風は三者三様。人物を含め森羅万象の根源を追い求めた求道僧の趣きのある高山、身辺に造形の小さい性を見出したアンチミストの脇田、人間存在の悲しい性を水彩画や木版画そしてガラス絵に映し出した清宮、とすることができ。それでいて日本画家である高山が後年モノクロ銅版画に「聖家族」のような見事な成果を残したり、洋画家の脇田が水彩画やリトグラフ、そしてガラス絵にも自らの感性を映し出したのも、どこか清宮を含めた三者に通じるものを感じる。戦前、戦中、戦後と激動の時代を生きつつも、安易に潮流に乗ることもなく、優れた表現世界を獲得した画家たちである。

生年順にまず洋画の脇田和を取り上げよう。脇

近代と現代を結ぶ画家としてすぐに思い浮かぶのが、日本画の高山辰雄（1912～2007）と洋画の脇田和（1908～2005）。ともに後進に多大なる影響を与えた画家だ。市場的にも美術史的にも高い評価を得、記憶に残り歴史に残る画家となった二人。時流に流されず深い精神性をたたえた作品を描き続けたそのありようは、現代を生きる画家たちにとって「良き道しるべ」となるに違いない。

田は戦前ドイツの美術学校に学んだ。三菱の駐在員としてベルリンに赴任した姉夫婦に同行、15歳での渡欧であった。美術学校では版画家のエリッヒ・ウォルフスフェルドについて人体デッサンを学んだ。絵に対する考え方や技法、時代の空気など、同時代フランスに渡った画家とは微妙に違ったものを身につけて帰ったようである。帰国後、日本水彩会や光風会に作品を発表。その後、猪熊弦一郎らと新制作協会の旗揚げに参加し、衆知のように戦後もずっと同協会会員として活躍をみせた。昭和39年からは東京藝大助教授・教授を務め、後進から慕われた画家でもあった。

さて脇田の作品の核であるが、これがなんとも言いようのないもので、言葉にしにくい。あえて言葉にすれば、詩的だとか抒情的だとか、あるいはナイーブだとかの陳腐な修飾語を用いざるを得ない。脇田の絵画を論じたもので美文とされているのは、1984年に美術出版社から刊行された『脇田和作品集』に収録された今泉篤男の一文で

ある。その冒頭の部分を紹介しよう。

「脇田和という画家は、私にとってどうにも不思議な存在なのだ。海水の中の夜光虫のように、妖しいまでの微妙な才能の燐光を放って私を何年となく魅惑しているにかかわらず、掌に汲みあげてみようとする、どこにもその姿は露さない……」

桑原住雄も今泉の一文に共感を示し「言葉を拒否するというよりも言語的説明を超えた次元で成り立っている」絵画だと指摘し、「画家にいざなわれて踏み込んだ夢想の国の晴れやかな光景は、まさに言語を絶している」と評論不能とまで言わしめている。

一方、高山辰雄は東京美術学校の日本画科に学び日本画家としてオーソドックスなスタートを切った。とは言え青年期には誰もが時代の空気に敏感に反応するもので、高山も新時代の日本画を追究する若手研究グループ「瑠夷画社」に参加。先輩世代の杉山寧、山本丘人、浦田正夫らとともにそれまでの院展あるいは文展系作家の画風とは

一線を画した表現を模索した。初期の代表作『砂丘』（東京藝術大学蔵）にも旧来の女性像とは別種の新時代の大膽な表現が伝わってくるが、その後帝展への入落選を繰り返して、画家として将来に自信を失うこともあったという。この時期、単に絵画制作上の問題だけでなく人間としての生き方そのものへの影響をポール・ゴーギャンに受けたことはよく知られている。戦後はざらついた岩絵の具の視覚的触感を生かし、人間、花、風景をモチーフのうちに「日月星辰」と名づけられる深みのある宇宙観を展開する。ゴーギャンに影響を受けた生命感にあふれた強い色彩からも離れ、モノトーンの求心的な世界へと移行する。晩年には焼き群

青を多用した墨絵と見まがうような表現世界に到達した。厳しい修行僧や密教の八祖図を描けば、『食べる』とか『いだく』といった子供や家族の日常の在り方を愛おしいように描いてもいる。また、牡丹図ひとつとっても単なる四季花鳥図に終わることなく、背後に大きな宇宙の存在を感じさせてくれる。

本稿は近代から現代へ移行する過渡期に優れた仕事を残した画家・日本画の高山と洋画の脇田をとりあげ、時代の断絶ではなく継承の道筋を探ろうという編集部の意図のもとに試みたものである。するとなぜかこの二人のほかに版画家の清宮質文の世界が浮かび上がってきた。これは筆者の資質

（美術ジャーナリスト）



高山辰雄 《月》（部分） 六曲一双屏風 1985年
「日月星辰 高山辰雄一九八五」出品作（日本橋高島屋）出品作
※同作品は、「師弟のきずな～高山辰雄と上田勝也」展（箱根芦ノ湖 成川美術館3月16日～6月15日）に出品予定



脇田和 《鳥の来る道》 1986年 油彩、キャンバス 181.8×227.3cm
第50回新制作協会
※同作品は、特別展「女のひとと鳥」展～朝倉勇・詩画集によせて（軽井沢 脇田美術館7月5日～10月26日）に出品予定

たかやま・たつお

1912年大分市生まれ。東京美術学校卒。日展を軸に活動し、聖家族シリーズなど、内面的なドラマをはらんだ個性的な画面を展開した。日本芸術院会員、文化功労者、文化勲章。2007年没。

わきた・かず

1908年東京都生まれ。青山学院中等部中退後、ドイツに渡りベルリン国立美術学校に学ぶ。36年新制作派協会結成に参加。68年東京藝術大学教授。98年文化功労者。鳥、花、子供など身近にあるものを好んで題材にとりあげた。2005年没。